



【2013年11月号】

▼FMやまびこ	渡辺 圭一	2
△里からのたより	山本 俊彦	8
FMやまびこ番外編その1	小林 邦子	10
▼FMやまびこ番外編その2	大石 晋平	14
△自閉症児の親も一日にしてならず	momoe	18
▼本棚から	津村 康	22

◆コラム (佐藤 絵利香) ……7	◇疑問符だらけの現場用語集 ……17
◇よこはま三步 (國分 香苗) ……21	◆後援会・編集後記 ……24



「やる気を引き出す！

～見通しを持つこと、ポジティブな関わり～

ポルト能見台 渡辺 圭一

今回は、ポルト能見台（生活介護事業所）に、昨年度春から通所しているBさんの日中支援の様子をご紹介します。

◆Bさんの紹介

人懐っこい笑顔がトレードマークのBさんは、22歳の男性です。療育手帳（A1）を所持しており、パソコンを操作して好きな画像や音楽を見聞きしたり、テレビゲームをする、ジグソーパズルを完成させる等、興味関心のある活動への取り組みを好みます。かたや、生活の中で様々な事柄に関するBさんなりの‘決まりごと’があり、それができなかつたり、変更されることに対する抵抗感が強く、特に家庭においてその反動が大きく見られます。

身近な人とのやりとりの手立てとして、学校時代には「マカトンサイン」を限定的に利用していたそうです。しかし普段から独特の方法があり、場面やその人との関係性・距離感によってBさんの行動も大きく異なり、それが自立を阻んでしまう場合もあります。

◆通所開始～1年間の様子と見えてきた課題

利用開始前の情報をふまえて、他者とのやりとりだけで動くのではなく、できるだけ自ら活動に取り組めるように個別の日課表を用意しました。その際、「何時に帰れるのか？」ということに気にする様子がみられたので、昼食の時間や退所時間はデジタル表示で知らせました。

初期の頃は多少の緊張感もあったのか、日課表を見て、量で示された作業も比較的集中して取り組めていましたが、しばらくしてから、作業中に立ち歩いて身近な職員に近づき、職員からの声かけ（注意）を求めるそぶりや、休憩の時間帯もその場所にいることができず、むやみに動き回ってしまう様子がみられました。

当時、主に関わっていた職員の評価は、以下のようなものでした。

- ・ 普段から使い慣れている簡単な文字や、時間をあらわすデジタル表示は読みとれて理解しているようだ。
- ・ 作業中に席を立つ理由には、職員の反応を窺っている時もあるが、作業の材料が不足している等の助けを求めている時もありそうだ。

- ・休憩中の立ち歩きは、休憩時間の終わりはわかっているけど、その間どのように過ごしたらよいか、わからないのではないか。

など、Bさんが周囲をどのように理解し、行動しているのかを考えるうえで、貴重な情報をいくつか得ることができました。その都度支援の見直しをはかりながら進めましたが、同じ場面や状況下で固着しつつある職員との関係性を整理しきれておらず、Bさんの本来の力を発揮してもらう事を目標に、大きく支援を見直すことにしました。

◆通所2年目から～作業エリアを変えて～大きな支援の見直し

着目した点は・・・

- ① 作業環境の見直し⇒これまではオープンスペースに作業席を設けていましたが、より明確にBさんの作業場所を示すため、周囲の人の動きが刺激にならないように、仕切り等を活用して、固有の空間を用意しました。
- ② 休憩時間帯にもやるべきことを明らかにする⇒初期支援から得られた評価結果として、何もしない‘休憩’はわかりづらい様子だったので、Bさんの興味のもてそのような活動（好きなキャラクターの絵合わせ、パズルなど）を休憩中に行うよう用意しました。
- ③ 作業内容の見直し⇒できるだけ集中が持続するよう、Bさんの得意な組立て系の作業を中心に、簡単すぎず難しすぎない工程や関心のもてそうな素材を用意しました。
- ④ 正当な評価場面をつくる⇒Bさんが1回（セット）の作業を終えたら、Bさんから‘手をあげるサイン’を身近な職員に示してもらい、丸印カードを職員が所定のボードに貼るという一連のやり取りを行います。その際、Bさんを褒めることで職員とのプラスの関係性がつくられていくことをねらいました。

これらのポイントをおさえて準備をし、新年度から新しい環境下での支援を開始しました。初日は席を立つことなく作業に集中して取り組みましたが、2日目の午後から席を立ち始めたため、その都度職員が席に座って作業をするよう声をかけました。そうすると今度はその声かけを求めるようになり、以前と同様の関係性に陥る危惧が生じました。

職員の関わり方も環境の一部であるということ整理しきれていなかったことに改めて気付きました。そこで、職員の関わり方を再度話し合い、確認しました。

□声かけに過反応する様子があるので、‘声かけ’は必要最低限にとどめ、離席があっても、原則Bさんが自ら活動に戻るまで見守る、あるいは動線に配慮する。

□また、作業開始時に、期待する立ち居振る舞い（＝Bさんが座って作業している様子）を写真で示したものを作業席の前に貼っておき、作業開始時に本人と指さし等で確認する。

□作業内容の見直し（受注作業：チラシの封入等の積極的な導入）

これらの内容を随時、職員間で確認し、より一貫した関わり方ができるようにしました。そんな中、「④正当な評価場面をつくる」支援は、Bさんも意識して自ら1回の作業が終わる度にその場で手を挙げ、職員を適切に呼ぶ行為ができていました（実はこれは、昼食後の薬をもらう際と同じ手続きで、1年前から自立的に行えていたので作業場面でも導入した、という経緯があります）。しかし、周囲を気にして離席したり、身近な職員に執拗な関わりを求める様子は相変わらず見られ、むやみに立ち歩く時間や範囲も徐々に長く、広がってきました。

そのような中、行動記録からBさんが作業に集中している時間帯の傾向がつかめてきました。それは昼食前や退所前の1時間前あたりから、でした。

◆ ‘Plan→Do→See’ をくりかえす

この間に得られた貴重な情報を整理し、再度支援の見直しを行いました。支援検討会議では、現グループ職員（3名）はもちろん、以前所属のグループ職員（3名）にも入ってもらい、これまでの経過を確認し、ご家庭とも相談したうえで、以下の支援を行うことにしました。

I. 作業環境の再見直しと場所の変更

新しいことを教える時は新しい場所で教えた方がBさんにとっては、わかりやすいのではないかと考え、同じフロアですが、位置を変更しました。Bさん側からの視点と職員側からの視点、両者にとってベターな環境設定をしました。

II. 作業ノルマの設定

利用前情報によると、やり直しや注意を受けるというような失敗体験のストレスから家庭で不安定状態になるおそれがあるため、できるだけ成功体験を積み重ねられる配慮をしてきました。例えば、定時に帰れるように作業量を調整する等です。そういった理由からこれまで、Bさんの状態に合わせて作業回数（量）をその都度決めていました。しかし今回の支援で、昼食時間、退所時間の1時間前あたりから、効率が上がる様子が見られたので、午前であれば昼食まで、午後であれば退所までの作業回数や作業量（やるべき作業）を明確に示し、それが終わらなければ、昼食や退所時間がやっこない、という事を伝えてみました。但し、帰宅後、家庭に影響が出てパニックになる恐れがあったため、事前に家庭と相談し、了解をいただきました。



Ⅲ. 正当な評価場面（‘褒める’ 機会）を意図的にもち、動機づけをはかる

4月から実施した②③の支援も再度見直し、加えて効果の見られた④の支援は継続しました。但し、仕組みは見直しました。つまり、以前は作業をこなせばこなすほど丸印カードがもらえる仕組みにしていますが、今回は最初から日課表とリンクさせ（※写真1）、作業セッションを終えるたびに、一定の合図を職員にBさんが示す（※写真2）と丸印カードがもらえて、それを埋めていくことで日課が次に進められる、という形態にしました。Bさんにとっては、それがわかりやすかったようです。職員に対する執拗な‘注意獲得的な行動’を制止するのではなく、適切なコミュニケーション場面を意図的に作り、人との関わり方を学ぶ機会にしていきたい、という当初のねらいを再確認しました。



写真1 例) 午後の日課表



写真2 完成後に丸印をもらう手順書
(手を上げて◎カードをもらって貼る)



写真3 本人の作業風景
(奥が作業席、手前が休憩)

◆支援開始から今日までの様子

いよいよ支援を開始しました。その結果は・・・。

最初の2日間はこれまでのように離席が多く、なかなか作業に取り組みませんでした。しかし今回は作業ノルマがあるため離席時間が増えれば、必然的に昼食時間、退所時間が遅くなってしまいます。実際に最初の2日間は昼食時間、退所時間が遅くなりました。

その経験があったせいか、3日目から本人の作業に向かう姿勢が変わりました。離席することなく作業に取り組み、休憩中もパズルや絵合わせに集中しています。元々職員や他の利用者の予定を気にすることがあり、時折その確認で離席はあるものの、ほとんど離席なく作業に集中することができています。

そして作業に集中して取り組めるようになったことで受注作業にも安定して取り組むことができ、時には本人からこの受注作業をやりたいという要求も出てくるようになりました。



チョコペンの封入作業

◆Bさん支援を通じて学んだこと

利用開始前から‘人との関わり方’をどのように整理していこうか・・・という事がBさんの大きな課題でした。手先も比較的器用で、ある程度の作業工程は見本をみて行える作業スキルのある方だったので、作業そのものへの取り組みはできる想定はしていたのですが、Bさんにとっては作業に取り組むよりも、「何らかの行動を起こして、身近な支援者に注意や声かけをしてもらう」ことに執着していく傾向が強かったので、そこへのアプローチに苦慮しました。

支援に取り組むにあたり「日課の見通しをもたせる」とよく言いますが、Bさんにとっては、それが「作業ノルマ」を提示することでした。ノルマと言うと少しきつく聞こえるかもしれませんが、それを伝えることでBさんも昼食時間や退所時間を意識して作業に集中できるようになり、Bさんにとって目安になったのではと思います(どのように伝えるかも重要)。

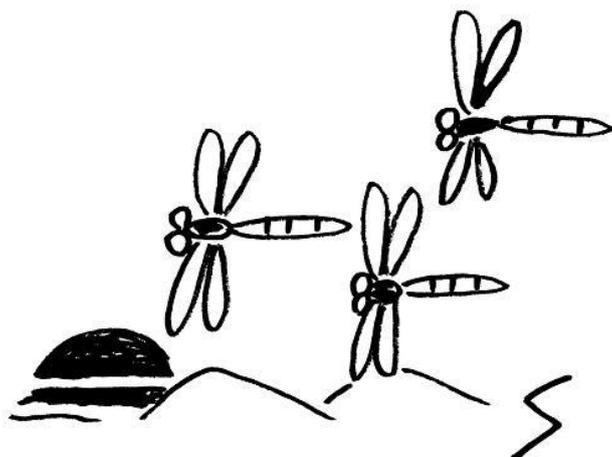
Bさんが作業に集中するようになってから、特に受注作業に取り組んだ時などは、それなりに疲れた様子で帰宅するようですが「本人の表情が良く、心地よい疲れになっている」とのお母様からの報告に、ホッと胸をなでおろします。

また、職員にBさん自身が「できました」と合図をおくり、それに職員がきちんと応え、賞賛する場面を意図的にもつことで、Bさんも嬉しそうにする様子が見られました。職員もBさんとポジティブな関わりができる事も、お互いにとってプラスになるのではないのでしょうか。まさに人との関係性は相互的なものなのですね。

今回の支援では、お母様からの貴重な情報もたくさんいただき、Bさんを知って支援に活かしていくうえで、とても参考になりました。

あらためて感謝いたします。





～コラム～

はじめまして。今年度から東やまたレジデンスで働いている佐藤絵利香と申します。よろしくお願いします。

私は小さい頃からスポーツが好きで、体操や水泳などを習っていました。中学に入学してからは、兄が柔道部に入部しているというだけで、強制的に柔道部に入部することになりました。体を動かすことは好きと言っても、投げられるのは怖いし、怪我が絶えないイメージがあったので3年間部活を続ける自信がありませんでした。入部してからすぐに、試合があり自信のなさから中途半端に練習を行っていた為、1勝もすることなく終わりました。負けたことがとても悔しくて、「負けたまま終わりたくない」と思い始めました。それから、投げられる恐怖感などを忘れ、練習を頑張りました。その結果、次の試合では上位を取ることができ、悔しさをばねに自分も頑張れば出来ると実感しました。練習をする中で、骨折や肉離れなど怪我をして挫折しそうな時もありましたが、柔道が楽しく、中学・高校の6年間を柔道に捧げてきました。私にとっての柔道は、中途半端だった自分を変えてくれたスポーツでこれからも続けていきたいと思っています。

これから先、楽しいことばかりではなく、辛いことなどあると思いますが、柔道から学んだことを活かして頑張っていきたいと思っています。

東やまたレジデンス 佐藤絵利香

田
ま
か
の
た
ま
り

今年度の新規事業について

管理部長 山本俊彦

今年度もすでに半年以上が過ぎ、次年度の運営体制や事業計画を検討する時期になりました。行政には、ケアホーム2箇所と南部方面の通所事業所の新設について意向を伝えていますが、その他についても今年度当初に塩谷理事長から示された事業展開の基本的な指針に基づいて、検討を進めているところです。

今回は、今年度から始まった新規事業のご報告をしたいと思います。

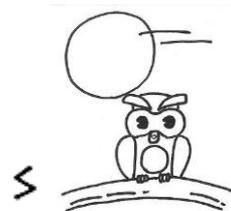
■「横浜日吉就労支援センター」

数年来の希望が叶い、4月から障害者就労支援センター事業を開始することができました。

就労支援センターは、基本的に障害種別（身体障害・知的障害・精神障害等）や障害手帳の有無を問わず相談・評価・求職支援・定着支援をおこなう機関ですが、市内の各就労支援機関が得意分野を活かして支援をしています。「横浜日吉就労支援センター」の担当エリアは港北区周辺区ですが、その他の地域にお住まいの相談者のご利用も多くなっています。上半期は86名の方からの相談があり、65名の利用登録がありました。精神障害者の方の相談が2/3を占め、内26名の方は発達障害者の方でした。発達障害者の方たちの期待の高さが表れていると思います。

■居宅介護事業

8月から「ヘルパーセンターやまびこ」では、居宅介護（ホームヘルパー）事業の指定を受けました。行動障害を持つ自閉症者への対応ができるヘルパーさんはまだまだ多くないため、ヘルパーの確保と併せて育成をしている段階です。そのため、当面はケアホームでの居宅介護を中心に事業を進めていく予定です。これは、次年度に国が検討を予定しているグループホーム・ケアホームの一元化への対応策の一つでもあります。



■計画相談支援事業

ご承知のように、サービス利用計画作成の対象者が大幅に拡大し、平成26年度までに障害福祉サービスの受給者全員が対象になります。全国的にも相談支援事業者数と相談支援専門員数の確保と質の確保が課題になっていますが、横浜でも状況は同様です。私たちとしても、そうしたニーズに応えるために、「東やまたレジデンス」が特定相談支援事業所として指定を受け、サービス利用計画作成の支援をしていくことになりました。当面は、複数サービスの利用希望がある方たちを中心に、相談支援事業を進めていく予定です。

■ケアホーム新設

昨年度はケアホームの新設はできませんでしたが、今年度は都筑区と磯子区にケアホームを1箇所ずつ新設する予定です。磯子区のホームは2月事業開始予定で、既に入居予定者は内定しました。5名定員に対し28名の希望者があり、ケアホームのニーズの高さを強く感じました。

都筑区のホームは設置場所の選定に紆余曲折があり、年度内に開設できる見通しです。1階は他法人が運営する高齢者多機能事業所となり、2階部分が当法人のケアホームとなる予定です。

その他、横浜市南部方面の利用ニーズに応えるために、通所事業所の設置を予定していましたが、残念ながら用地・物件の確保ができなかったため、今年度の事業所設置は断念せざるを得ませんでした。次年度は、何とか実現したいと考え、その旨行政にも意志表示をしています。

新規事業を進めるにあたって、場所・物件確保に難航しました。しかし、場所・物件の問題と伴に良い人材の確保も急務です。経験や資格を持った職員を確保・育成していくことが、事業を進めていく上での大きな課題となっています。





番外編

その1

振り返る道向かう道⑥ 投薬が始まる

小林 邦子

最重度自閉症の息子俊文は47歳になった。世間の理解は得られなかった幼児期少年期。東やまたレジデンス入所という大きな幸運をいただいて16年。ようやく適切な支援指導をいただくようになり、現在は穏やかな日々を過ごしている。母親の私は高齢者の域に入って改めて振り返る過ぎゆきである。

ひばりが丘学園に入所した当時、園生の週末帰宅の習慣はなかった。年末年始、5月の連休、夏休みの年3回、1週間から2週間の帰宅があるのみだが、俊文は2月に入所して3か月も帰宅できないのは、あまりにも可哀想に思った。可哀想だからと言えば、甘えさせるためかと許可がでないだろう。俊文が居ないことに慣れてしまい、家庭で俊文の場を無くしてしまいそうという不安もあったので、それを理由に週末帰宅を相談した。「帰宅で甘やかすと家庭が逃げ場になって、家庭復帰した場合に元の状態に戻りますよ」といわれたが、訓練という名目で隔週の2泊3日が許された。入所から2か月後、はじめて帰宅をした俊文は静かでおとなしく、好みのカラー百科を見つめたりブロック遊びで過ごした。その後、保護者会で「週末帰宅訓練時代」の始まりという説明があり、他の園生にも広げられていった。

学園入所から3か月後、春の遠足で小田急ファミリーランドに行った。観光バスでの東名高速道路をゆく。自分が運転せず俊文と行くのはなんと身も心も楽なことか。幸いこの日は、幼稚園遠足の団体がなかったため幼い子供に手を出す心配もなく、遊園地では思い切り遊ばせた。広い池の足こぎボートでは、俊文一人で足こぎをしてハンドルで方向をきめての運転である。私はわきに乘坐してもらっているだけ。つらい思いの日々のなかの楽しかった1日が忘れられない。

隔週の2泊3日の週末帰宅を続けていたが、帰宅ごとに俊文は荒れ気味になってきた。小さな子供の泣き声に反応し外に飛び出してゆく。その時の勢いをとどめるのに私は全力を振り絞る。現在でも私は子供の泣き声に耳をふさいでしまうほど神経が逆立つことがある。この頃の俊文を止めようとした必死の場面のフラッシュバックが起きるのだ。俊文も泣き声を聞くことで、自分が泣いた場面のつらさがフラッシュバックするのだろう。この行動が一般社会で生きられない難点となるのである。学園に週末帰宅を願ったのは自分という思いがあり、学園に相談できないまま、2泊を必死に続けた。

入所の翌年、俊文より年少の子供が2人入所した。その子供たちが泣き声をあげると、俊文は興奮して小さい子供を殴ってしまうという。怪我をさせては大変なので俊文に抗精神薬を飲ませることにしたと説明を受けた。嫌ですと言えば退園しかなく、仕方のないことだった。金曜日に帰宅のために迎えに行き目を疑った。散歩から時間通りに戻ってこないで玄関で待っていたが、元気いっぱいのはずだった俊文がまともに歩けない。一歩足を出そうとするが3センチほどしか足が出ない。つま先で土を擦るように苦しそうに歩を進め、目はうつろでよだれを垂らして、重病人の態である。投薬とはこんなに恐ろしいものなのか。散歩を好んだ俊文にとって苦痛の散歩である。胸が張り裂ける思いで俊文を車に載せて帰宅した。

アーテン2錠、P313と刻印された白の錠剤2錠、青色の錠剤1錠の計5錠を3回、一日の合計15錠を飲ませよう学園より薬を渡された。家の中をまともに歩けず手が震えている。思うように動けないため俊文は焦れて泣く。俊文は2歳以後に夜尿などなかったのに、その晩蒲団をぬらした。大学病院のY医師が学園の主治医である。Y医師の来園日を待って学園の医務室に行き、薬を減らしていただけないかとお願ひした。すると医師は不快そうに「乱暴をして困るからと学園から頼まれて、その通りに処方しているのです」と言った。

次に俊文を迎えに行くと保母長に激しく叱られた。「Y先生にあなたは何と勝手なことを言ったのですか。こんな施設に来てくださる先生などいないのです。やっと来ていただいているのですから、今後あなたは絶対にY先生と直接話しをしてはいけません」と厳しく言い渡された。県立施設のひばりが丘学園の園長や指導課長は、他の県立施設からの異動などで変わるが、保母長は長年ひばりに勤務されていて、保護者間のことは全て取り仕切っておられた。知恵遅れの子供たちに社会の理解が全くなかった時代、身を挺して子供達を守り対偶の改善を図ってくださったおかげで、多くの子供たちが保母長によって救われてきたのである。園生を怪我させる子が居たら薬で抑制するしかないという強い意志をお持ちで、親は身を低くして言葉をのみこんで過ごすしかないのかと悟り、もう何も言えなかった。



寮の子供たちも同じ薬をのんでいるようだ。元気だった子が俊文と同じように、よだれを垂らし、ろれつがまわらなくなっている。「薬が嫌だなんて気持ちがわかりません。薬があってこそ、この学園で暮らすことができるのですよ」寮の職員もみな同じ考えだった。今まで俊文がどんなにかかろうと、俊文の目のかがやきが救いであったが、ここまでにした母親の責任かと悲しく諦めた。俊文はしばらくすると顔中に吹き出ものがでた。肌は乾いて生気がなく醜い顔つきになってしまった。俊文が園生を傷つけることは絶対にあってはならない。しかし俊文にも穏やかな時期がある。その時は投薬を減らすなどの配慮が欲しいと心で叫んでいたが、逆に投薬は徐々に増やされてゆく。量が増える毎にノートに記録した。何の役にも立たないだろうと思いつながらの、むなしい抵抗であった。入所施設という存在がなかったら、わが家族は崩壊していた。抗精神薬の多量の投与には疑問を抱きながら、耐えるしか方法がなかった。

園生のうち、生活自立のできている学齢児は近くの小、中学校に通い、その他は通学はないままに学籍を置いていた。昭和55年、園生の何人かが保土ヶ谷養護学校に編入し、中学2年生となった俊文も学園のマイクロバスで通わせていただけることになった。職員の方々にとって通学の日々の支度は大変な作業だろうが、親として思いがけない喜びである。学校の参観日に保護者として参加したが、学校は施設と違うのは当然だが、指導の場というより教え育てる場という雰囲気を感じた。2年生3クラスの担任の先生方は、「生活とは遊びと労働」として、遊びは「人や自然とのかわりの中で生きる喜びを感じるもの」。労働は「自然に働きかけて物を作り出し暮らしを成り立たせてゆくもの」という取り組みを実行されていた。俊文は施設で見せる表情とはまったく違い、いきいきとしている。親がしっかりしていて、家庭から養護学校に通う日々であれば俊文は多量の投薬は避けられただろう。そんな思いが常に湧くのだが、通学への有り難さもいっぱいだった。せめてもの謝意として、土曜日に俊文を園に迎えにゆく時は、通学している園生たちの上履きや通学履きの靴をせせせと洗わせてもらう週末帰宅だった。通学は俊文にも母の私にも教えられることの多い有意義な2年間であった。



俊文が自転車で電車の線路を走った事件以後は自転車を隠した。更に施設に入所、薬の服用による手足の震えなどから、もう乗ることはないだろうと廃棄した。しかし、暫くすると薬に体が慣れるのか元気になり、また徐々に投薬が増えるという繰り返しで、元気が出ると自転車を探している。夏休みで帰宅していたある日、目を離れたすきに外に出てしまったので慌てて探しに出た。「息子さん、自転車で公園の方に行きましたよ」と教えてくれた人がいた。近所の子供の自転車に無断で乗ってしまったのだろうかと思案しながら公園に走る。俊文はブランコを漕いでいて兄の10段ギアの自転車がそばにあった。投薬以前はブランコを立て漕いでいたが、坐って漕ぐようになっている。この大きな自転車に乗れるのかと驚いた。兄が高校入学の時、親の支出の少ない近くの公立に入ってくれたため、夫が褒美として買ってやった自転車である。車は家に置いてきたので自転車で逃げられたら追うことが出来ない。小さい子供が公園に来たら俊文は手を出すだろう。私はもう大きくなった俊文を止める力もない。内心は必死ながら冷静をよそおい「俊君、ドライブに行こうか」と声をかけた。俊文はブランコを降りて自転車にまたがった。自転車のサドルは高くハンドルが低いため、普通に乗ることはできないようで、荷台にまたがり足で地面を交互に蹴りながら発進させた。私は後ろの荷台を掴んで走るつもりでいたが、俊文が荷台に腰をおろしたためつかみ損なった。「ドライブに行くよ」と夢中で叫びながら追いかけた。自転車で地面を蹴りながら走る俊文と、必死の形相となって大声で追う母親。異様な状景を展開する母と子だが、人の目など構ってられない。俊文は真っ直ぐに家に戻ったので、何事も起こらなかったことにほっとした。投薬がない元気な俊文なら遠出したろう。こんな時は投薬を仕方ないのかと思ってしまう。

俊文は兄の体操パンツに興味を持った。紺色の短パンを素肌に穿くと気持ち良いらしい。兄に新しいのを買い、古い方を俊文の物としたのだが、兄が学校の支度をしているすきに通学カバンから出して穿き、それを浴槽に投げ込んでしまった。兄は怒って俊文を足で蹴る。蹴る真似をしているのだが、俊文は頭を両手で覆い手足を縮めて畳に伏せていた。体の小さな私は2人の間に割って入るなどにはできない。兄は俊文を叱りつけて古い短パンを持って出ていった。俊文は手足を引っ込めている亀の子のように身動きもせず伏せたままなので、兄に蹴られて怪我をしたのだろうかと思案しながら見つめていた。兄が玄関を出てしばらくすると、突然俊文は起き上がって、ニタリと一人笑いだした。そしてキャッキョと歓声をあげながら、兄が身につけていたセーターとジーンズ、靴下を一抱えにして、浴槽に投げ込んでしまった。全く母の知らなかった一面で、こんな不敵な笑いをする俊文を初めてみた。





入社して8か月

横浜やまびこの里ってこんなところだった

東やまたレジデンス 大石 晋平

■自己紹介

私は今年の4月に横浜やまびこの里に就職しました。自閉症に興味があり、また自閉症の方と関わりを持つことが好きでした。大学時代は自閉症についてさらに知識を深めたく、大学の授業以外でもアルバイトで自閉症の方と関わりを多く持つことで勉強してきました。そんな私が就職活動中に見つけたのが、社会福祉法人横浜やまびこの里でした。この法人は TEACCH プログラムという自閉症の方が理解しやすい支援方法を基に、日中支援や生活支援を行っています。私がこの法人に就職したいと思った理由の1つに、この TEACCH プログラムを学びたいということが挙げられます。このプログラムを学ぶことで、自閉症の方が生活しやすい環境をつくることができると思いました。また、この法人で仕事することによって自閉症支援のスペシャリストになりたいという私の目標にも近づけることができると思いました。

■自分の仕事 ～やまびこはこんなところだよ♪～

私は東やまたレジデンスに所属しています。法人全体では知的障害を伴った自閉症から高機能自閉症まで、いわゆる「自閉症スペクトラム」全体を支援していますが、私が所属している東やまたレジデンスは入所施設で、最重度といわれる自閉症の方が多く入所しています。作業場面ではスケジュールの設定、作業をする自立課題の準備などを、生活場面では食事や入浴、余暇支援など利用者方の生活の支援をしています。

私は生活場面の支援をすることもありますが、主に日中の作業場面の支援をしています。利用者の方が作業しやすいようにするにはどうすればいいのか、どのように環境を整えたらいいのかを考えています。東やまたレジデンスは他の施設とは異なり、自閉症に特化した支援を行っています。自閉症といっても一人一人違いますし、求められるニーズも異なります。そのため支援は大変で難しいですが、チームで一人一人に合った支援を組み立てていくため、利用者本人に合った支援を突き詰めていくことができます。

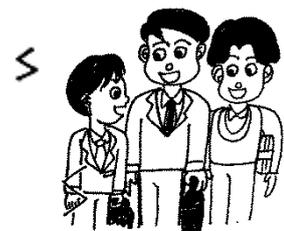
支援方法や対応の仕方で悩んだり困ったりしたときは、上司や先輩が優しく指導してくださり、また仕事以外の相談にも乗ってくださいます。私はここがやまびこの強みだと思っています。職員間の仲がとても良く、私の所属している係では10月に上司の企画で横浜スタジアムへ野球観戦に行きました。係全員では行きませんでした。みんなで楽しんで盛り上がり、チームとして結束力が高まりました。また、バレーボールやフットサルなど職場以外でも交流があり、同じ係だけでなく法人全体の職員とも接点が多くあります。

■仕事をしていて楽しいこと、うれしいこと

「利用者の方にこちらが伝えたいことを伝えるにはどうしたらいいだろう？」入職したての頃は利用者に伝えるツールがわからず、上司や先輩の対応を見ても「どうしてこんな伝え方をするのだろう」と理解できませんでした。また、自分にできるのか不安になることもありました。しかし、利用者本人のこと、支援の背景を知ることによって「こうすれば理解してくれるんだ」「こうすれば伝わるんだ」ということがわかってきました。利用者の方にこちらが伝えたいことが伝わったときはもちろん嬉しいです。自分にもできるんだと自信につながりました。また、入職したての自分と今の自分を比べ、自分の変化をみることも仕事の楽しさかなと思っています。4月には考えもしなかったことや理解できなかったことが、今では考えることができ、理解でき、自分から行動できる、発言できるようになりました。自分の成長を感じることができるといことがとても嬉しいです。

■同期は大切に！

同期は、他の係はどのような感じなのか、どのような支援をしているのかなどの情報交換や仕事での悩みを気兼ねなく話せる貴重な存在です。また、私たち同期は年齢がさまざまなのでいろいろな話ができおもしろいです。年齢こそ違いますが、同じ1年目なので話しやすく、話をすることによって刺激にもなります。同期とは働く時間帯や配属もそれぞれ異なり、全員で集まるのが難しいのですが、私たちは月に1回くらいのペースで同期会を開いています。仕事が大変で疲れたときも同期会があるとモチベーションにつながりますし、同期がいることで充実した気持ちで仕事をするができていると思います。



■仕事以外の時間も大切に！

私は学生時代にたくさん遊びました。友人や後輩と飲みにいったり、朝までフットサルをしたりとアグレッシブに活動していました。特に旅行が好きで、アルバイト代で国内外を旅行していました。体力には人一倍自信があったのですが、入職したての頃は新しい場所に引越し、生活し、覚えることがたくさんあったため疲れがなかなか取れず、帰宅してはすぐに寝るという生活になってしまいました。休日も身体を休めることに時間を使ってしまい、プライベートの時間を有効に使うことができていませんでした。社会人になると遊べなくなるというわけはありませんが、体調管理や生活リズムを整えることが難しくなると感じました。しかし生活リズムを整えることで、仕事や仕事以外の時間を充実させることができると思いました。学生時代とまでは言いませんが、今はうまく遊びつつ、身体を休めることができているので充実した毎日を送ることができています。

■最後に…

私がやまびこの里に入職して8ヶ月がたちました。入職したての頃は右も左もわからず、毎日覚えることがいっぱいでした。また、生活がガラッと変わったことで精神的にも疲れていたと思います。しかし、8ヶ月がたった今では4月とは異なり生活リズムを整えることもできて環境にも慣れたので、働くときは働いて、休むときはしっかり休んで、遊ぶときはがっつり遊ぶ！ことができ、充実した毎日を送っています。また、余裕が持てたことで今では自分から意見も言えるようになりました。

まだまだ支援員としてスタートしたばかりですが、自閉症支援のスペシャリストになりたいという自分の目標に向けて、これからもがんばっていきたいと思います。

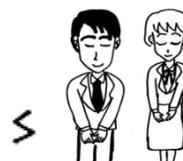
2015年度 横浜やまびこの里 新規職員募集開始(支援員・相談員)

詳細はインターネットで「マイナビ2015横浜やまびこの里」で検索してください。

◎11月1日から 福祉特集に掲載

◎12月1日から エントリースタートします。

横浜やまびこの里に就職希望の方、アクセスよろしくお願いします。



疑問符だらけの現場用語集

疑問符だらけの現場用語集 (52) 不登校対策

以前、私は発達障害者支援センターで働いていましたが、そこで多くの高機能自閉症の成人とその家族の方々と出会うことになりました。これまで、どこに相談をしいかわからなかったり、他の相談機関ではうまく対応してもらえなかった当事者や家族の皆さんが、発達障害者支援センターが新たに設置され一挙にやってきたという構図です。その中で改めて気づかされたのは、診断のあるなしに関わらず、学齢期にいじめや先生の無理解な対応で不登校や転校した方が非常に多いことです。また家でも、そういう状況に置かれた子どもが、家族からも理解されず、きつく叱られたり疎まれたりし、一方で本人が家庭内暴力や非行行為を繰り返し警察が介入したという事例もありました。

現在、私は自閉症の子どもたちの療育セッションと相談を兼ねたプライベートスクールを大阪で運営しています。約160名の登録生徒がおり、私が直接関わった期間だけでも2割程度の方が長期の不登校や一時的な登校渋り、別室登校などを経験しています。

文部科学省の定義では、「不登校児童生徒とは何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために、年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」とされます。不登校児童の割合は、平成23年度の調査で「小学生で304人に1人(0.33%)、中学生で38人に1人(2.64%)、全体で89人に1人(1.12%)」になっているそうです。

こうやってみると、私の経験則では、自閉症の子どもが不登校(あるいは不登校予備軍)になるリスクは、一般の子どもの10倍ぐらいあるのではないかと感じます。

中には、担任の先生や学校全体の対応が相当拙く、あるいは本人から学校への拒絶反応が非常に強い場合は、「しばらく学校を休みましょう」と親御さんにアドバイスをすることがあります。しかしながら本来は、学齢期は学校に(楽しく!)通う習慣をつけてもらいたいですし、そこでさまざまなことを学んで成長して欲しいと思います。それが、子どもたちを育てるとして社会全体における学校の責務でもあります。

そういうことで、自閉症の子どもの不登校を予防し、不登校になっても長期化しないでスムーズに復学していく有効な取り組みが求められます。私なりにアプローチしてきた事例を整理すると、それは次のようになります。

①登校渋りの兆候が見えたら、過度の促しは避け、保護者や担任などの関係者が集まりすぐに原因を分析する。

②その多くは、学校での過ごし方に困難さがあることと、生活リズムの崩れに起因する。

③そのため、関係者が緊密に連携して学校の環境・対応を本人が安心して過ごせるように整え直し、安定した生活スタイルを確立した上で、段階的に復学を進めていく。

④不登校が長期化した場合は、学校に替わる日中の活動(行き場)を用意するとともに、本格的な対策チームを立ち上げ、組織的・継続的に支援をおこなっていく。

<自閉症eサービス代表 中山清司>

6月30日 市長選。対抗候補に「有名」国会議員がついて市議会もほとんどそちらについて、選挙戦が結構大きくなり…現職が2選。

7月2日 次男が4月にできたベーカリー&喫茶の生活介護施設（通所）に移動することになる。3月から月2回そちらに行って実習してきたが、10月フルオープンを見据え、8月上旬に全面移動することにする。この日私が見学して一日の流れを見、スケジュールの準備をすることにする。製パンの工程一つ一つは作業の性質上スケジュール化は難しいので、そこは職員に任せ、そのほかの部分を考えることにする。

7月6日 私たちの会が所属する医療・介護・障害者支援の市民団体が開く集会に東京の自立生活センターの事務局長さんを迎えて、近年めまぐるしく改定や制定がされている障害者に関する法や制度について整理して話していただく。日常的に福祉用語に接している人は「すごく頭の中が整理された」と言っていたが、1期目の市議会議員はアンケートに「理解しようと努めたが、用語がわからず難解だった」と素直に（ふう）記載しており、また改めて関心があってもこのあたりの溝を埋めようとするのは大変だなあ、と思ったのであった。議員の方は、「具体的に何をしてほしいか簡潔に言ってほしい」と言われるが、なんの意見も持たない人に「これをこうしてほしい」ということの怖さを知っている私たちは「そんな単純なものじゃないわ〜い！」と打ち上げで叫ぶ。しかし、「障害者」側が一枚岩でないという方たちにも逃げ道？を作ってしまうので、私たちもいわゆる「障害種別の差」を乗り越える努力は必要。

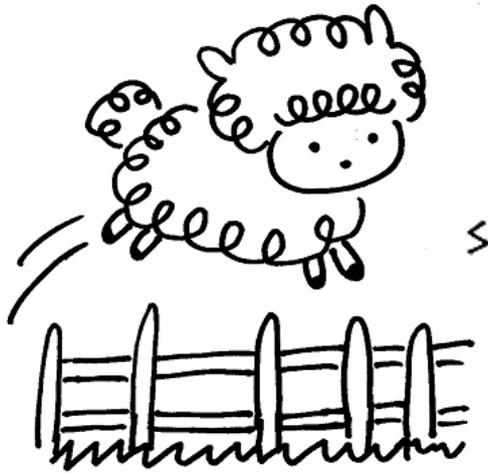
7月8日 義姉と北海道旅行に行っていた義母が帰宅。家まで送ってくれた義姉を車で駅まで送る途中、義母の「やらかした」いろいろを私に訴える。日常的に「やらかされて」いる私は「さもありなん」と思うのだが、義姉は「老人力」（@赤瀬川原平）が着々となっている義母を受け入れられきれていないのだろう。義母は北海道在住の義姉の次男が大好きで、「Sちゃんがあそこに連れてってくれた、今度結婚する彼女はこんな人だそうだ」と楽しいことだけ私に話す。



7月10日 隣の市で「しょうがいのある子もしょうがいのない子もともにぞでよう」活動をされている方を呼んで受容期にあるお母さんにお話をさせていただく。もう30年以上前の話だ、という私たちの仲間も、若いお母さんたちも涙、涙で聞き入り、そのあとのランチ懇親会も、今まで話したことがない当時のつらかったことを話せた仲間もいたりするくらいのとてよよい会になった。しかし、そのあとアンケートを読むと「講師の方のように立派なお母さんにはなれない」という感想がとてよ多く、「素直に子どもの様子を見て、それに沿った育て方や環境整備をした」という、まずじっくり子どもと向き合って自分のできることをしよう、という（肝心な）ところは伝わりきれないんだな、というかまだ「自分（親）がたいへん」というところから抜けきれない状態なんだな、と思った。そういえば20年前の私もそうだったかもなあ、と思い、一週間を埋めるべく3か所の児童デイや放課後支援を使い倒す彼女らの「受容」をどう支援していったらいいかなあ…と考えたのであった。

7月22日 月末になると「次の月のスケジュール」を要求する次男。ついに8月5日からベーカーリーへの通所が始まること分かるなり、早速この朝、ベーカーリーに御出勤。あのねえ、スケジュールの前倒しはやめてほしいですううう…（迎えに行く私…）





よこはま三歩

はじめまして。今年4月から、東やまた工房で勤務しております、
國分香苗と申します。どうぞ宜しくお願い致します。

私は福島県出身で、やまびこの里に就職を機に、横浜に引っ越し
てきましたので、横浜は、まだまだ知らない場所がいっぱいです。最
近ようやく、こちらでの生活にも慣れ、休日に気になる場所に少しず
つ出掛けています。

自然あふれる福島で過ごしてきた私にとって、横浜は「都会」とい
うイメージが大きかったのですが、最近小さな自然を発見しました。
私が紹介するのは、「都筑中央公園」です。この公園はセンター南の駅
近く、市役所通りに面しておりますが、緑の多い、広い公園です。公
園内は、展望広場まで、散歩コースのようになっており、勾配もある
ので、展望広場まで歩くと、ちょっとした運動になります。また、と
ころどころに芝生や木陰もあり、休日には家族連れで賑わっています。

横浜といえば、みなとみらいや中華街などの、華やかな場所もたく
さんありますが、たまには都会の喧騒から少し離れて、緑の中でゆっ
くり過ごされてみてはいかがでしょうか。

東やまた工房 國分香苗



本棚から

はりまなだものがたり
『播磨灘物語』

司馬遼太郎 講談社文庫 全四巻

時期的にいまさら・・・な感じもしますが、NHK 大河ドラマ『八重の桜』の視聴率が低迷しているそうです。司馬遼太郎をして「幕末の会津藩があったればこそ僕は日本人という民族をちょっとは信用できる」と言わしめた、会津藩とその人々の物語です。

大河ドラマは幕末を舞台にするとヒットしないというジンクスがあるようです。これは戦国時代を舞台にした物語に比べて時代背景が複雑で、視聴者にとっては様々な事情が飲み込めず、物語に入り込めない事が一因であるかと思えます。かと言って戦国時代の時代背景が必ずしも単純であるという訳ではないのですが・・・。

そこで、『黒田官兵衛』を主人公にした2014年の大河ドラマを存分に楽しむために、今のうちに予習しておく事をお勧めいたします。他にもいろいろな作品がありますが、今回は、読みやすい司馬遼太郎の本で紹介します。

黒田官兵衛は、豊臣秀吉の天下取りに大きく貢献した軍師の一人ですが、隠居した後に名乗った『黒田如水』の名で記憶されている方も多いかもかもしれませんね。

群雄割拠する戦国時代において、小大名は近隣の強力な勢力に阿って『従属す

る』という方法で生き残りをかけてきました。官兵衛がはじめに仕えた小寺氏も、その様な方法で戦国の世を生き延びようとし、三本の矢の逸話で有名な毛利氏を頼ろうとします。しかし官兵衛は、遠方の織田信長を頼る事こそ小寺氏の生き残る道であると主君や宿者たちを説き伏せます。結果的に小寺氏は秀吉の仲介で信長に従う事になりますが、この事がきっかけで官兵衛自身は波乱万丈な人生を歩む事になります。

物語の中での官兵衛は、知略、弁舌、豪胆さ、時代を先取りする目を持ち合わせ、なおかつ人心掌握にも長けた爽やかで魅力的な人物として描かれています。司馬遼太郎は「こういう男と友だちになりたい」と、この物語を結んでいます。が何となく分かるような気がします。

この作品を読めば何の問題もなく2014年の大河ドラマを存分に楽しめる事でしょう。ただし、脚本や演出、演者が司馬遼太郎の筆を上回ることができれば・・・の話ですが。

<津村 康>



新設ケアホームで使用する物品を譲ってください！！

横浜やまびこの里では、2014年2月から横浜市磯子区内でケアホーム「ハウスJOY（ジョイ）」の運営を開始します。

ケアホームの生活で使用する家具や家電製品等、以下のものでお譲りいただける物がありましたら、ご連絡ください。

ダイニングセット（テーブル・イス）、机、ソファ、収納用家具、テレビ、オーディオ、アイロン等

※数年以上の使用に耐えられる物をお願い致します。運搬等についてはご相談に応じます。

<連絡先>

ポルト能見台（担当：田中・小松）

電話：045-788-5511

FAX：045-788-5551

住所：横浜市金沢区能見台東2-4



△▼横浜やまびこの里後援会▼△

横浜市内で自閉症という障害を持つ人たちが地域で生活するためのサービスを、一つずつ作り出していく活動をしている『社会福祉法人横浜やまびこの里』の活動のバックアップを目的としています。

入会された方には「マンスリーやまた」「後援会報」をお届けします(郵送)

会員種別	個人会員	法人会員
会費	1口 3,000円/年	1口 10,000円/年
入会時期 (定時入会)	7月または1月	
会費納入方法	(ア)7月入会者 7月～12月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の7月に納入し、以後毎年7月となります。 (イ)1月入会者 1月～6月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の1月に納入し、以後毎年1月となります。	
振込口座 (郵便振替)	横浜やまびこの里後援会 <口座番号> 00240-3-76163	

★後援会のお申し込み・お問い合わせ★

横浜やまびこの里 後援会事務局

TEL045(591)2728

～編集後記～

最近、「相談」「アセスメント」「プラン作成」といった研修に携わることが多くなりました。計画相談が始まったこともあり、「相談員」という肩書の人も増えていきます。しかし、そうした研修等に携わる中で、相談とは相談室の中で相談員がおこなうことだけではなく、日々のご家族とのちょっとした会話やご本人とのやりとりがベースになってこそ成立するものだと改めて感じています。マンやま読者にはご家族の方達もいらっしゃると思いますが、「忙しそうだから・・・」などと遠慮せず、ぜひ職員たちと色々な話をしていただければと思います。(桜井美佳)

表紙写真 ペンネーム：国鉄福私鉄道(こくてつふくしてつどう)
 編集 社会福祉法人横浜やまびこの里 (編集責任者 小林信篤)
 横浜市都筑区東山田町 270 番地
 TEL.045-591-2728/FAX.045-591-2768
 法人ホームページ <http://www.yamabikonosato.jp/>

印刷 ワークステーション 横浜市神奈川区西神奈川 1-14-6-1F TEL.045-316-5710
 購読料1部 15円(税込み)